

Title	Poesía Narrativaに於ける直説法不定過去と不完了過去に就いての一考察
Author(s)	中岡, 省治
Citation	大阪外国語大学学報. 29 p.79-p.98
Issue Date	1973-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80461
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Poesía Narrativa に於ける直説法 不定過去と不完了過去に就いての一考察

中 岡 省 治

Una Consideración de los Pretéritos Indefinido e Imperfecto de Indicativo en la poesía narrativa española

Este pequeño ensayo tiene por objeto disertar sobre la función peculiar de los pretéritos indefinido e imperfecto de indicativo que aparecen como los dos tiempos principales en la poesía narrativa española a lo largo de la historia de la lengua española, a base del Poema del Cid, obra maestra de los cantares de gesta así como también de las dos creaciones prestigiosas del mester de clerecía que son el Poema de Fernán González y el Libro de Apolonio. El tema y la materia están limitados al español medieval, especialmente al de los siglos XIII y XIV, enfocándose en los verbos aparecidos en las partes narrativas de las obras épico-clericales, pero espero ver algo común con las funciones de las dos formas verbales precitadas del español moderno y contemporáneo en lugar de buscar una fase exclusivamente medieval.

(I)

中世イスパニア語は juglares (吟遊詩人) の口に歌われた多くの叙事詩によって文学に登場して来た。これは、将来の “castellano” としての発展の可能性を秘めたロマンセの、最初の自己主張であった。Poema del Cid, Gesta de los Infantes de Lara によって代表される叙事詩は文学史上、mester de juglaría と総称され、12～13世紀に最盛期を迎えた。この形式は当時の一般大衆の最大の関心事と目される歴史的事件を歌い上げるのを主な目的とした。他方、この形式に対するものに聖職者を中心とする mester de clerecía がある。Berceo を始めとするこの創作活動も13～14世紀に活潑に行なわれた。この両者の差は主題、形式のみならず、この文学活動に携った文人の意識の中にも明らかであるが、他方、語りかけの形式、poesía narrativa (物語詩)

的色彩が濃厚であることも否定出来ない。⁽¹⁾ここに先行する叙事詩の影響の大きいことも想定出来るし、統辞法に於いても、両者に多くの共通性を指摘することも可能である。⁽²⁾

以下本稿では *mester de clerecía* の二作品、*Poema de Fernán González*, *Libro de Apolonio* (以下、Fernán González, Apolonio とする) の時制形式を *narración* (説話) という観点から考えてみたい。特に従来から論議の対象となった直説法不定過去と不完了過去に、特に *mester de juglaría* の代表作、*Poema del Cid* と比較しつつ、焦点を当ててみたいと思う。

(II)

叙事詩を代表とする物語詩は特殊な性格の韻文形式で、当時の「情報手段」の最たるものであった。特に、英雄の偉業を語るためには、歴史の諸事件の単なる羅列ではなく、語り手、聴き手にとって最大の関心事、永遠不滅の超時間的要素を力強く浮び上らせる様な叙事詩特有の表現形式が存在しなければならなかった。ここに叙事詩に固有の言語形式の存在を認める必要がある。⁽³⁾これに就いては古くから、いわゆる *Consecutio Temporum* (時の一致) に囚われない自由奔放な時制の使用が指摘されている。この様な時制の混淆は伝統的時制論—時制が論理上の時間的区分を表わすとする立場—では解決し得ない性質の問題を提起する。即ち、個々の場で語り手の意識に浮んだ時制がまったく、非論理的、直観的に用いられているといえる程に時制の混淆が激しい。「過去」をその言表の対照とする以上、又聴き手を意識した説話である以上、語り手はそのテーマに主観的距離を設定し、逐次その視点をかえ、説話を展開して行ったと考えられる。これが時には過去時への現在時制の侵入となったが、従来の時制論では総合的解決の得られない問題で、これが叙事詩、*Romancero* に親しんだ者の持つ大きな焦燥感ともなっている。⁽⁴⁾

これに対し、以下に取扱う二作品、Fernán González, Apolonio では時制の使用にまったくの地味さがうかがえる。物語詩という性質にも拘らず、*Cid* にあれ程用いられた「歴史的現在」がまったく存在しない。この歴史的現在の有無を出発点として、従来から言語活動の *popular* な分野と *culto* な分野との区分がなされて来た。特に叙事詩、*Romancero Viejo* を評し平俗語

(註1) *Mester trago fermoso non es de ioglaría,/ mester es sen pecado ca es de clerezía,/ fablar curso rimado por la cuaderna vía,/ a sílavas cuntadas, ca es grant maestría.* (*Libro de Alexandre*, estrofa-2) と述べその立場を明らかにしているが、しかし、一方では、*Quiero fer una prosa en román paladino,/ en cual suele el pueblo fablar su vecino/ ca non so tan letrado por fer otro latino;/ bien valdrá, como creo, un vaso de bon vino.* (*Vida de Santo Domingo*, estr.-2) と言っていることにも留意したい。

(註2) *Diccionario de Literatura Española* (*Revista de Occidente*, 1964), págs. 514—515.

(註3) 《No será el lenguaje trivial, práctico, del coloquio diario, sino un tipo de expresión ennoblecida, estilizada》; Rafael Lapesa: *De la Edad Media a Nuestros Días*, págs. 13 y 14.

(註4) 叙事詩、*Romancero Viejo* のユニークな時制の用法については次の一節を夫々の証左として挙げ得よう。

—Abenámar, Abenámar, moro de la morería,

¿Qué castillos son aquéllos?

i Altos son y relucian!

(lenguaje popular) の典型を想定し、この特徴を持たぬ *mester de clerecía* を教養語 (lenguaje culto) としたのである。しかし、上述の時制の混淆も *Cid* では説話部にのみ見られ、対話部には存在しないこと⁽⁵⁾、以下問題とする Fernán González, Apolonio には、説話部、対話部にも表われないこと、特に対話部での時制の「正則な」使用が見られることをも指摘出来る。従って、一つの説話形式として、特に説話部 (parte narrativa) のみを取り出し、この部分に特有の時制形式検討の必要性を感じるのである。

(Ⅲ)

この種の試みの一つとして、Stephen Gilman の《Tiempo y Formas Temporales en el Poema del Cid》(1961) がある⁽⁶⁾。彼は *Cid* の中枢をなす時制が不定過去で、これが総時制形式

—El Alhambra era, señor,
y la otra es la Mezquita;
(Romancero Abenámár, 205)

Soltaron las riendas, pienssan de andar,/ çerca viene el plazdo por el reino quitar./ Vino mio Çid yazer a Spinaz de Can;/ grandes yentes sele acojen essa noch de todas partes./ Otro día mañana pienssa de cavalgar./ Ixiendo va de tierra el Campeador leal,/ de siniestro Sant Estevan, una buena çibdat,/ passó por Alcobiella que de Castiella fin es ya;/ la calçada de Quinea ivala traspasar. (Poema del Cid, 391—400)

特に、Romancero Abenámár の《era》に就いては K. Vossler: Algunos Caracteres de la Cultura Española, pág. 21 を参照のこと。これは Vossler が Hofmannsthal に宛てた《Carta Española》の中で取り上げた問題であって、それ以後大きな論争を引き起したと言われている。尚、この部分の不完了過去の解釈については Joseph Szeletics: Tiempo y Verbo en el Romancero Viejo (1957), Capítulo IV に詳述されている。又叙事詩特有の時制の使用に就いては次の一文を引用すべきであろう。

El uso de los tiempos verbales era particularmente anárquico. El narrador saltaba fácilmente de un punto de vista a otro; tan pronto enunciaba los hechos colocándolos en su lejana objetividad (pretérito indefinido), como los acompañaba en su realización, describiéndolos (imperfecto). Hasta el pretérito anterior o el pluscuamperfecto perdían su valor fundamental de prioridad relativa para tomar el de simples pasados. De pronto la acción se acercaba al plano de lo inmediatamente ocurrido (perfecto), o disfrazada de actualidad presente, ocurría más real —como si dijéramos, visible— ante la imaginación de los oyentes...

Rafael Lapesa: Historia de la Lengua Española (1959), pág. 159. この引用部分については、Stephen Gilman が R. Lapesa からの私信を基に、尚詳細な解釈を示している (Tiempo y Formas Temporales en el Poema del Cid, pág. 16, Nota 6)。又 R. Menéndez Pidal: Romancero Hispánico, I, pág. 68 をも参照のこと。

(註5) この点 *Cid* と Romancero Viejo とは形式を異にすることに注意すべきである。

(註6) Anna Granville-Hatcher: Tense Usage in the Roland, Studies in Philology, 1942; Stephen Gilman: Tiempo y Formas Verbales en el “Poema del Cid”, Gredos, 1961.

この二論文に加え、A. Granville-Hatcher の《Epic Patterns in Old French》, Word, 1946 が

の中で、38.9%の割合を示すこと、これに次ぐ現在、不完了過去、完了過去との関連々係を挙げた上で、これ等諸時制の用法が伝統的時制観では解明されないこと、一見非論理的な時制の用法も Cid 特有の文体上の特徴として理解出来るとし、特に動詞とその行為の主体との密接な関連を示し、《aspecto estilístico》という概念さえをも導入している。そこで、この S. Gilman の手法に従い、以下に Fernán González, Apolonio 説話部の時制を統計的に調査し、Cid との共通性、物語詩に於ける時制形式の用法を考えてみた。

表1、表2からも明らかな様に、Cid とは異なり、Fernán González, Apolonio 共 pretérito

(表1) Fernán González⁽⁷⁾

時 制	単数	複数	合計	%
Pretérito	684	495	1,289	56.80
Imperfecto	317	299	616	27.12
Presente Ind.	75	41	116	5.10
Pluscuamperf. avie -ra	76 31} 45}	31 11} 20}	107 42} 65}	4.71
Imperf. Subj.	60	39	99	4.35
Potencial	57	27	84	3.65
Presente Subj.	12	29	41	1.80
Pret. Anterior	33	6	39	1.73
Futuro Ind.	6	4	10	0.44
Pretérito Perf.	1	3	4	/
Imperativo	0	3	3	/
	1,321	954	2,271	100

ある。これも、特に叙事詩に於ける時制の用法、特に現在時制に関し大いに示唆に富む考え方を我々に示してくれる。

まず Hatcher は《Tense Usage in the Roland》で直説法現在が Roldan の中枢をなす時制であって、その頻度数は375の完了過去、325の単純過去 (Passé Défini) に対し1600をも数えることを指摘し、この叙事詩の主人公である Roldan に帰せられる行為、又この叙事詩の中でも最大の関心事と思える様な種類の経過は、その殆んどが直説法現在時制で表わされていると述べている。換言すれば、Chanson de Roldan は現在時制で書かれた叙事詩であって、この作品に於いては、完了過去も現在時制の機能しか持たぬ時も多々あることも明らかにしている。これとは逆に単純過去は第二次的な意味しか持たぬ行為、経過を示すにすぎないとするのである。これを文学時代初期の時制の混用現象と見做し、ここに前述の popular な言語活動の発露を見るべきなのか、一步を進めて、いわゆる叙事詩と歴史記述との間に位置する一文学形式を認定すべきなのかについては、いずれも否定的な態度を取り、単純過去、現在、完了過去……等の諸時制形式が、その Roldan の詩人のかなでる、微妙な音色の琴の音の三つの主要な記録装置の如きものであって、これが夫々の場でのクライマックスを求めて、漸強音、漸弱音を響かせるといった機能を果すものとするのである。一言で言えば、この時制形式の混淆はいわゆる chanson de geste に特有の説話上の技巧の一つと結論している。即ち文体的な要求をこの時制の混淆の中に指摘したのであった。

(表2) Apolonio

時 制	単数	複数	合計	%
Pretérito	835	204	1,039	52.01
Imperfecto	35	156	491	25.00
Imperf. Subj.	38	76	114	5.81
Presente Ind.	77	24	101	5.15
Potencial	65	7	72	3.67
Pluscuamperf. avie -ra	56 37 19	8 8 0	64 45 19	3.26
Presente Subj.	14	13	27	1.38
Futuro Ind.	8	13	21	1.07
Pret. Anterior	16	3	19	0.96
Futuro Subj.	8	1	9	—
Pretérito Perf.	2	0	2	—
Imperativo	0	1	1	—
	1,454	506	1,960	100

(註7) Poema del Cid は1140年頃の編纂とされるが、記録上は14世紀初頭(1307年)の写本で現在にまで受継がれている。R. Menéndez Pidal の校訂本によればその verso 数は3,730である。Poema de Fernán González 及び Libro de Apolonio は夫々13世紀中葉をその編纂年次とし、前者は 4 versos の estrofas 752 (A. Zamora Vicente の校訂本)、後者は 654 estrofas (J. Janer の校訂本)より成る。尚時制抽出に当っては夫々前記のテキスト、即ち Poema de Fernán González, Clásicos Castellanos, No. 128., Libro de Apolonio (Poetas castellanos anteriores al siglo XV, Biblioteca de Autores Españoles, Tomo 57) を用いた。

尚(表1)(表2)の頻度数抽出に当っては、次の諸点を考慮した。1) 時制個々の名称は Real Academia Española に準拠した。2) Perfecto (=preterito perfecto de indicativo) は aver+p. p. に併せて ser +自動詞の p. p. をも加えた。しかし Pluscuamperfecto (=pretérito pluscuamperfecto de indicativo) では ser +p. p. は除外した。これはこの構文と受動構文との間に確然とした区別を付け難い為で、この場合には ser の pretérito に算入した。同様に pluscuamperfecto (=pretérito pluscuamperfecto de indicativo) も ser+p. p. の構文を含まず、《era venido》は imperfecto に算入した。これも、中世イスパニア語に於ける「複合時制」の未完成な性質によるのである。同じく -ra 形もその統辞法上の機能はいわゆる「大過去」、²「過去」のみではないが一例えば条件文帰結節に現われる場合、一轄して大過去に含めた。3) Potencial の項は potencial compuesto をも含み、又 Imperfecto de Subjuntivo は複合形をも含むこととする。4) Presente (=presente de indicativo) は《Quiero en Apolonio... tornar》の様に、一人称、二人称による説明的な場合をも含む。従って、本来の意味での説話部分での presente の使用頻度数は尚低くなって来ると言える。

尚、以下に比較の意味で、S. Gilman による Poema del Cid の説話部の時制使用頻度数をも挙げたい。

により構成された作品であって、いわゆる “lógica temporal” が一貫して継持されていることが判明する。即ち陳腐な、いい古された *pasado histórico*, 論理と時制形式とを最大限に一致せんとした意識をここに見ることが出来ようし、これが、叙事詩と *poema épico-clerical* とのジャンルに分類される *Fernán González, Apolonio* とを区別する大きな特徴の一つとなる。この様に見ると、過去時に対する過去時制として、これが表現上、文体上何の技巧も又創意もない、まったく平板で、歴史書の表現形式と何ら異ならない時制の使用となってしまうのであろうか。

(表1) (表2) によれば、作品全体の諸時制形式の内、*pretérito* が56.8%, 52.0%を占め、*imperfecto*が27.1%, 25.0%を示すのであって、この過去時制を示す二形式で、全体の75~83%をも占めてしまっている。*Cid* では32.1%の高い使用頻度を表わす *presente* はいずれも考慮の対象外となる。前述の *Cid* に見られた時制、特に *presente* の過去時への転用、即ち *versos* 390~400の様な時制形式を自由に転換させ、これを過去の行為、経過に充当するという表現形式は、*Fernán González, Apolonio* に於いては皆無である。

言うまでもなく *Cid* を始めとする叙事詩、*Romancero Viejo* に特有の複雑な時制形式の混同は韻律の点からも説明される。特に8音節を維持せんとする *Romancero Viejo* の傾向がある特定の時制の使用を促し、これがひいては、一見非論理的と思える時制の混用を招く理由の一つとして指摘されている。しかし、又 *Fernán González, Apolonio* に於いても、韻律の点から、特定の時制形式、例えば *imperfecto* がかなりの部分に亘り連続して用いられることも再三で、これが逆にある時制を意外に長い部分維持させるとの結果を生んでいる。この様に同一時制のみに固執することは、単調、稚拙きわまりのない言表を生み、これを避けんが為の手法が多く取ら

<i>Tiempo</i>	<i>Singular</i>	<i>Plural</i>	<i>Total</i>	<i>Porcentaje</i>
Pretérito	793	237	1,030	38.7
Presente	349	505	854	32.1
Imperfecto	264	164	428	16.0
Pretérito perfecto ...	78	81	159	5.9
Imperf. Subj. (-se) .	37	42	79	3.0
Condicional	21	12	33	1.2
Pluscuamperf. (-ra) .	12	12	24	0.9
Presente. Subj.	13	5	18	0.7
Imperfecto (avie) ...	7	8	15	0.6
Futuro	7	6	13	
Pret. Anterior(ovo) .	8	1	9	0.9
Futuro Subj	1	1	2	
SUMAS TOTALES...	1,590	1,074	2,664	100

S. Gilman:Ob. Cit., pág. 23.

尚以下では *pretérito indefinido de indicativo*, *pretérito imperfecto de indicativo* を夫々 *pretérito* 及び *imperfecto* とする。

れるのも目新しいことではない。この様な単調さを打破せんが為の有効な手段として Cid 及び Romancero Viejo では、規範文法の枠を超越せる時制形式の自由奔放な使用をほしいがままにしたとすれば、同じく、説話的な性格の強い作品でありながら、Fernán González, Apolonio の特に説話部は同一時制形式に固執する、律動性、流動性の欠除したまったく退屈なものになってしまうのである。こうするとその作者が、その主題に関してまったく客観的な立場を維持する歴史家の視点でしかそのテーマを扱わず、情感的要素の存在する余地のない一形式、既設の枠にはめ込まれた一形式を予想させることにもなる。⁽⁸⁾

(IV)

さて、G. Stephen は特定の時制形式と特定の動詞との緊密な関係を指摘している。即ち、Cid の中に用いられている諸動詞間には、時制のおしなべた、平均的な配分の見られないこと、それとは逆に、ある特定の動詞が特定の時制形式を特恵的に用いていることである。例えば、compeçar, dezir は pretérito を、penssar, tener は presente を採る割合がこの上もなく高いとの事実であって⁽⁹⁾、これは Cid 全体の動詞時制形式の内、夫々38.7%, 32.1%もの高い使用頻度を示すのが pretérito, presente であることを顧れば、実に大きな意味を持つ指摘である。そこで以下に対象とする二作品の説話部での主要二時制、pretérito と imperfecto と個々の動詞との関連を表示してみた。

表3から、Cid の場合と同じく、pretérito が特定の動詞に集中的に用いられていることが明らかになる。この様な pretérito のみを集中的に用い、imperfecto を嫌う動詞グループの存在、

(表3) ⁽¹⁰⁾

	Pretérito		Imperfecto		Otros tiempos		Total	
	F. G.	AP.	F. G.	AP.	F. G.	AP.	F. G.	AP.
andar	3		7	17			5	24
aguisar		10					0	14
alçar	9		2				11	2
aver	81	55	50	39			146	116
(inf.)	40	34	9	1				
(tener)	40	19	27	34				
(imp.)	1	2	14	4				
caer	4	10	3	1			9	16
començar	19	19					20	20
cuydar	7	4	7	3			16	11
dar	33	31	14	6			59	55
dezir	64	108	19	12	15	27	112	147
demandar	11	10			(pres. ind.)	(pres. ind.)	12	10
entrar	7	20					10	20

(註8) Américo Castro: La Realidad Histórica de España (1954), pág. 276.

(註9) S. Gilman: Op. Cit., pags. 38—44.

enviar	13	2					13	2
entender	5	13		4			7	20
estar	2		19	13			28	15
fablar	15	7					17	8
fallar	14	11					18	12
fazer	56	52	22				91	90
ferir	9		10				19	0
finçar	13	6					15	0
ir	48	42	24	4			77	52
(gerun.)	28	20	8	4				
(inf.)	10	10	5					
	10	12	11					
llegar	17	5					19	6
llevar	6	7	5	2			14	11
mandar	26	26	3				29	28
meter	12	14	1	1			13	19
morir	13	3	1	1			20	6
mover	13	3					13	3
oir	19	6	5	1	{ 10 (-sse) 20 (pot.) }	{ 23 (-sse) 27 (pot.) }	29	8
poder	19	18	25	20			64	71
perder	9	10					11	11
prender	3	14	2	1			5	17
querer	27	43	30	34	12 (pres. ind.)	14 (pres. ind.)	77	102
recudir	1		15				1	15
rescebir	8	3	2	1			10	5
saber	9	12	8	13	{ 22 (-sse) 31 (pres. ind.) 21 (-ra) 22 (pot.) }	{ 25 (-sse) 12 (pres. ind.) 10 (pot.) }	23	32
salir	14	13	2	4			17	25
ser	177	98	140	110			405	259
(P. P.)	118 59	75 23	44 96	60 50				
tener	22	12	26	24			51	38
tomar	10	2	2				15	2
tornar	16	25	3				28	28
traer		1	8				10	3
venir	22	15	30	13			59	35
ver	44	37	7	9			56	47

(註10) 表3は Fernán González と Apolonio とに表われた主要動詞の pretérito 及び imperfecto の使用頻度数である。まずこの表の作成に当っては次の事柄を考慮した。1) Aver は当然のことながら意味論上の区別が要求されるので、本来の動詞としての意味を持つ場合、非人称用法の場合、perífrasis の三つの区分を設けた。Ir の場合にも本来の動詞としての意味を持つ場合と他の perífrasis の場合とを区別した。ser の場合にも他の動詞の助動詞として機能する場合と本来の動詞として機能する場合とを区別した。特にこの ser と殆んど同意語とされる seder の存在は、この二作品に於いては僅少であるが為、ここでは考慮の対象とはならないことをも付記したい。2) Otros Tiempos の項では、pretérito と imperfecto 以外の時制に高い使用頻度数を示す場合にのみその時制と頻度数を挙げた。特に presente に高い頻度数を示す動詞はいずれも本来の説話部分というよりはむしろ詩人、又は語り手の註釈的な表現、例えば、《Non vos queremos... la cosa alongar —Fernán González, 326, a; Oyt me, diz, amigos, sy Cristo vos perdon— ibid., 201, c; Ebrrol' dixeron syempre, assy es oy llamada —ibid., 140, d; El Rey de los çiellos es de grant prouençia, Libro de

これとは逆に、両時制にまたがってかなり高い使用頻度数を示す動詞グループの存在とは *pretérito* の絶対的性質、又 *imperfecto* の相関性という抽象的分類によっても説明されよう。つまり、前者の表わす行為、経過はそれ独自で完全な性質のもので、これが為、それ自体と対立する今一つの形式、*imperfecto* とそれ等のグループに含まれる動詞との関連付けが困難であったこと、他方、後者では、あくまでも相関的性質から、その形式の選択にある程度の中が認められ、ここから、二つの形式に亘るまたがり認められたとも言えるだろう。これを *pretérito* の持つ絶対的性質、排他性と称し、*imperfecto* に特有の相関性として区分出来る。さて、ここで又比較の便宜上、Cid を引用したい。S. Gilman の調査によれば、*pretérito* に大きな撰好を示す動詞には、meter, levantar, espedir responder, mandar, decir, fallar, ver, hablar, alçar, comenzar, besar, enviar 等があり、これ等の諸動詞は、それぞれ個々の使用頻度数の70%以上が *pretérito* である。*Imperfecto* の場合は、ir, aver, aguijar, echarse, estar, ir (gerundio), aver (=tener), llegar, salir, tener, entrar, querer 等で、夫々の30~23%程度がこの時制によって占められている。⁽¹¹⁾ 勿論のこと、Cid と表3に表われた Fernán González, Apolonio との間に時制の配分、個々の動詞に於ける特定時制の撰好に就き大きい共通性を求めるのは無駄な努力でしかない。特に Cid 程変化に富んだ時制形式の使用は見られないし、又 Cid で重要な機能を果している *presente* も上記二作品には存在しないことを見ても明らかである。しかし、強いて共通性を求めるとすれば、començar, dezir, fallar, llegar, salir, tornar 等、いわゆる完了相の動詞は *pretérito* にかなり高い頻度数を示し、andar, aver [=tener 及び impersonal], estar, querer, tener 等、不完了相に属するものは *imperfecto* を用いる割合が高いことが指摘出来る。これを基礎とすれば、Cid の動詞形式に関する考察を少し拡充、歪曲した形であれ、この *mester de clerecía* の二作品にも当てはめることが可能となる。『過去』の叙述にあっては、不完了相の動詞を *imperfecto* に、完了相の動詞を *pretérito* に置くのが通常の表現形式であって、*pretérito* と *imperfecto* とを主要時制とするこの Fernán González と Apolonio とは、この表現形式にのっとった典型的な時制形式の配置を行なった場合の一つとも考えることが出来るのである。

さて、ここで完了相と非完了相、これと *pretérito* と *imperfecto* とを関連付けたが、これは

Apolonio, 93, a》の様な場合に限られるといてよい。従って、これ等の特定の動詞の *presente* の使用頻度は今回は問題としない。3) Total の項には *pretérito*, *imperfecto* のみならず、その他の時制形式全てに亘って個々の動詞の頻度を調査し、その数を挙げた。これによって、この問題とする二時制の全時制形式に於ける比率が明らかになると思う。

(註11) S. Gilman, Op. Ct., pág. 40 以下の Tabla III, Tabla IV。特に, pág. 47, Tabla V —verbos de porcentaje elevado en los cuatro tiempos principales ではこの個々の動詞の特定の時制撰好が如実に示されている。この点でも留意すべきはその比率の差であって、*pretérito* の割合が圧倒的に高くなるのに対し、*imperfecto* は前者程高い比率を示さないこと、加えてこの時制に高い比率を示す動詞の多くが *presente* にも *pretérito* にも又かなりの割合を示すことが明らかとなる。この様に考えると、*pretérito* の排他性、*imperfecto* の相関性という対立機能が浮び上って来るし、Cid でもこの対立機能に拠った第二次的な表現上の役割を想像出来るのである。

従来から諸々の批判を受けながらも、時制と相との一致を示す典型的な場合と見做されて来ている。⁽¹²⁾ 即ち、時制と「時」の関連というよりは、むしろ両時制の内容とする行為の完成、これに対する経過の連続という面から両者を解釈する必要が生じて来るのである。従って、pretérito と imperfecto を中枢の時制とするこの二作品は、この二時制形式に固有のアスペクトの特質を最大限に利用した叙述方法を取っている訳で、この特質の前に時制の表わす「時」の観念が稀薄となり、夫々の行為が逐次、完成、成就されて行くことを表わそうとする意識の表出を読み取ることも出来るであろう。Cid に就いては、この場合の特徴として、presente が不完了相の動詞グループと緊密な関連を示し、pretérito が完了相グループと密接に関連することが指摘されている⁽¹³⁾、これもイスパニア語の持つ、説話形式の中での pretérito の機能を明示することになるろうし、片や imperfecto の時制形式としての不安定さを明らかにもするのである。さて、上述の様な叙述形式は普遍性を持つものであろうか。これまで言語活動での具体的表出である諸文学作品に就いて、特に個々のジャンルが動詞時制形式を如何に選択するかに着いても議論がなされて来たし、又統計的材料も存在するが、この点に就いての各言語での統計的資料は断片的でしか提示されていなかったとの感を強くする。幸にして、イスパニア語には、William Bull, *Modern Spanish Verb-Form Frequencies* (1947) によって、それまで不完全な形でしか補足されなかった文学活動の諸々のジャンルと特定の動詞時制形式との関連が明確に浮び上って来ている。これは近代イスパニア語に関するものではあるが、今問題とする物語り詩の説話部に現われた動詞時制形式の考察にこの上もなく有益なヒントを与えてくれる。この Bull の統計によれば、短編小説、物語り、小説の分野では pretérito と imperfecto が圧倒的に多く現われ、片や叙情詩、戯曲、文芸批評、哲学論文等では presente の頻度数の高いことが報告されている⁽¹⁴⁾。

(註12) J. Roca Pons, *Introducción a la Gramática*, 1960, págs. 60 y sigs.

(註13) S. Gilman, *Op. Cit.*, pág. 50.

(註14) W. E. Bull: *Hispania* 30 (1947), págs. 451—466. 特に pág. 458, Figure II, Ver—Form Frequencies in Complete Texts によれば pretérito + imperfecto と presente の比率は次の様な結果となる。

Abreu Gómez: *Heroes Mayas* (短篇小説集, México) 54. 811—19.873

Alfredo Cantón: *Bravo León* (短篇, Panamá) 50.631—11.499

Jesualdo Sosa: *Sinfonía de la dan zarina* (叙情詩, Uruguay) 19.999—44.331

García Lorca: *Poeta en Nueva York* (叙情詩, España) 19.961—46.388

Xavier Villaurrutia: *La Hiedra* (戯曲, México) 11.797—38.013

Martínez Sierra: *Sueño de una noche de agosto* (戯曲—対話部のみ, España) 5.240—36.2

Jacinto Benavente: *Una pobre mujer* (戯曲, España), 8.919—37.382

Eustasio Rivera: *La vorágine* (小説, Colombia), 38.090—19.995

Eduardo Luquín: *Los perros fantasmas* (小説, México), 36.044—18.405

Benjamín Jarnés: *Cervantes* (伝記随筆, España), 13.032—48.852

Amado Alonso: *Poesía y estilo de Pablo Neruda* (文芸批評, España), 1.573—64.986

Joaquín Xirau: *Amor y Mundo* (哲学随想, España), 1.342—65.982.

これは、聴き手、読み手を意識した場合に話者がその言語活動の中で如何に夫々の時制形式を配分するかとの一傾向を示すものであって、前掲の表1、2と比較した場合、尚明確に個々のジャンルに於ける特定の時制選択の傾向が浮び上って来る。

この言語活動の分野に対照的に現われた二つの分野の内、今我々の興味の対象となるのは *pretérito, imperfecto* を中心とする前者の場合である。これは主として行為、経過の記述、説話が主体となる言語活動の一分野であって、一事件についての記述、描写を行なう為の新聞記事、短かい報告、伝説の再現、物語り形式の創作、短篇小説、長篇小説、歴史書等が具体的な作品として挙げられよう。特にこれ等の言語活動に共通しているのは、いずれも話者作者の「物語りをしよう」とする意識であると思う。この意識によって、全体が綜合化される場合、文体的な要求、各ジャンルを規制する法則が存在しても、こういう個別的特質をはるかに超越した、いわゆる“*Narración*”という一言語活動の目的のための言語形式が設定され、その中でも表現の中核となる動詞時制形式が前述の *pretérito* と *imperfecto* とを中心とする言表の展開を生んだものと考えられるのである。Bull の統計の結果もこの観点から理解すべきであろうし、これはイスパニア語のみならず、フランス語、ドイツ語に関しても同一の時制の配置が統計的に証明されているのである。⁽¹⁵⁾

さて、再び時制としての *pretérito, imperfecto* に立帰る必要があろう。規範文法で言う、前者は点状行為 (*acción-punto*) を表わし、後者は線状行為 (*acción-línea*) を表わすとの固定概念はイスパニア語のみならずその他ロマンス語文法で、両時制の機能を象徴する理論であった。これに、アスペクトの面からの関連性を持たせ、夫々前者は完了相を後者は不完了相を帯びるといった点での差異が強調されて来た。しかしここではこのアスペクトという概念を「一過程への、話者の心的態度の表出で、これがその進展を中心として考えられたり、又この進展を軽視して全体を一まとめとして捕えられたりする場合の区分法」という一般論で解釈するに止らず、これに加うるに、個々の言語活動の場にこの概念を具体化し、夫々の持ついわゆるアスペクト文体一意味的面側機能を見ることが必要であると思う。即ちこの二大区分が現実の言語活動の表出の中で、特に説話という表現形式の中で、行為の完了、未完了以上に尚具体的な機能、意味を荷っていることにも注目せねばならない。前述の Harald Weinrich はこのアスペクトなる概念をロマンス諸語には適用しがたいと主張しているが、⁽¹⁶⁾ ここでは Knud Togeby を引用したい。

(註15) フランス語、ドイツ語の場合は、Bull のイスパニア語に関する統計程組織的ではないが、Harald Weinrich: *Estructura y Función de los Tiempos en el Lenguaje* (1968), págs. 63—66; pág. 97 に断片的な記録がある。これによっても、後述の(註18)の時制選択の傾向がイスパニア語にのみ固有の現象ではないことが明らかになる。

(註16) H. Weinrich: *Op. Cit.*, pág. 194 y sigs. 尚イスパニア語に就いては次の様な考え方が支配的である。

«Comparando, pues, las tres expresiones “Envejecía —envejeció— ha envejecido”, resulta claro que en la primera designamos un proceso en curso, en la segunda un proceso pasado sin idea de desarrollo, y con independencia de sus consecuencias, y en la tercera un proceso explícitamente terminado y en sus consecuencias... Los tres tiempos pueden referirse a una misma época pasada sin ninguna diferencia, tampoco, desde el punto de vista del modo. La diferencia, pues, no tiene una relación necesaria ni con el tiempo, ni con el modo, ni con la voz. *Es una diferencia de aspecto.*» J. Roca Pons, *Introducción a la Gramática*, págs. 61 y 62, 63.

彼はその著書, *Mode, Aspect et Temps en Espagnol* (1963) でイスパニア語の時制形式の中に、従来の完了相、不完了相を認めると共に、新たに *aspecto neutro* なる概念を立て、これは直説法現在に帰せられると述べている⁽¹⁷⁾。次いで彼はこの現在が完了相的機能をも又不完了相的機能をも併せ持つことを指摘した上で、《*Par contre, il faut donner une définition sémantique positive des deux autres aspects, parce qu'ils sont extensifs l'un par rapport à l'autre.*》と述べ、不完了相が連続して表われる場合にはこれが静的描写を行なうのに有効で、又完了相の連続は、例えば伝記に見られる様に、急激なテンポで展開する物語形式に頻繁に表われ強烈な印象を言表に作り出すこと、行為の切迫性を表わすのに適していることを指摘している。加えて、その意味・文体上の機能に就いては、《*Le plus souvent les parfaits et les imparfaits alternent, en formant dans le texte, pour ainsi dire, deux plans. Les parfaits constituent le premier plan, les événements, les actions qui sont accomplies et qui font avancer le récit, tandis que les imparfaits composent le second plan, tantôt le décor, tantôt les raisons ou les conséquences, tantôt le contenu de déclarations ou de pensées.*》⁽¹⁸⁾として、両者の機能面での区分を明確にしている。

これは実に示唆に富む観察であって、特に叙事詩, *Romancero Viejo* に表われた諸時制形式、特に *pretérito* と *imperfecto* に関する心理的観点からの複雑きわまる考察を全面的に排除してしまう程に強い説得力を持つと言えるだろう。これは、*Cid* に指摘されている一つの言語事象、即ち *pretérito* と単数主語との関連の緊密さ、特に固有名詞、中でもエル・シッドを主語とする場合には *pretérito* の使用頻度数が圧倒的に高いこと、これに反して固有名詞でない主語が *pretérito* を取る割合がこの上もなく低い割合を示すことをも考える時に、この上もなく魅力的な考え方となると思う⁽¹⁹⁾。

(註17) K. Togeby: *Op. Cit.*, pág. 110; págs. 121—122. 尙同一の立場からイスパニア語動詞のAspectを取扱ったものに、Emilio Alarcos Llorach: *Estudios de Gramática Funcional del Español* (1972) のII, *Sobre la estructura del verbo español* がある。又 J. Roca Pons: *Op. Cit.*, págs. 56—68 の記述も具体的で非常に興味のある考え方であると思う。

(註18) K. Togeby: *Op. Cit.*, págs 122 y 123. 特に《*premier plan*》と《*second plan*》とは夫々何を以て位置付けられるかに就いての一般論的規準は存在しないと思う。この決定にあたっては一言表を構成する諸要素が重要な鍵となるのであり、ここに *contexto*、時には *texto* 全体を考慮する必要性も生じて来ると言える。しばしば経験することだが、文法書に於けるごく少数の語からなる一文の解釈の面で生ずる困難さも、このいわゆる *contexto* の欠除に帰因するのである。これと関連して、Américo Castro は特に叙事詩の解釈の為には《*gramática lógica*》ではなく、《*gramática axiológica*》が優先されるべきことをかなり熟っぽい語調で説いている—*Op. Cit.*, pág. 277 y sigs.

(註19) S. Gilman: *Op. Cit.*, pág. 58 y sigs.

尙、物語りを始める時に用いる冒頭の表現として固定している《*Erase que era...; Erase una vez ..*》の存在、*Romancero Viejo*, 叙事詩にも頻発する *ya + imperfecto* も、一言表への導入部、又は二言表を関連付ける為の橋渡的な機能を持つと理解出来る。*Cid* の次の一節も如実に、説話形式に於ける二時制形式の機能を示すと思う。

Ya folgava mio Çid con todas sus compañas;/ áquel rey de Sevilla el mandado llegava,/ que presa es Valençia, que non gela enparan,/ vino los veer con treynta mill de armas./

さて、pretérito と imperfecto が全体の70%以上をも占める Fernán González と Apolonio とを上記の《deux plans》(=dos planos) の点から考察する必要がある。ここでは、その例証として Fernán González の次の一節、Estrofas 653~658 (Clásicos Castellanos, No. 128) の説話部を引用したい。これはカスティリア建国の雄、フェルナン・ゴンサレスがナバラの王、サンチョ・オルドニエス (Sancho Ordóñez) の奸計に落ち、Castroviejo に捕われの身となったが、ロンバルディアの一伯爵の援助を得、特に許婚のサンチャ姫 (Sancha: la infant donna Sancha, de todo byen cumplida) が自らの手でフェルナン・ゴンサレスを牢獄から救出し、二人して Burgos を目指して敵の手を逃れて行くことを語る件である。その逃れて行く途中で目出たく、二人の救助に向っていた家来達と出会い、主君と家来共々 Burgos に赴き、ここで目出たく二人の結婚の儀が行なわれることをその内容とした、かなりテンポの早い説話部である。

653 Dexemos i a ellos entrados en carrera,

por llegar a Casty[e]lla que muy [a]çerca era;

dire de castellanos, gente fuerte e ligera,

avenir no s' podian por ninguna manera.

654 Los vnos queryen vno, los otros queryen al,

commo omnes syn cabdiello avenien se muy mal,

fablo Nunno Laynez de seso natural,

buen cavallero d'armas e de sennor leal.

655 Començo su rrazon muy fuerte e oscura:

《Fagamos [nos] sennor de vna pyedrra dura,

semejable al conde, des[s]a mesma fechura,

[sobre] aquella pyedra fagamos todos jura.》

656 《Assy commo al conde las manos le besemos

pongamos la en carro, ante nos la lleuemos,

por amor del buen conde por sennor la ternemos,

pleito e omenaje todos a ella faremos.》

657 《Sy ella non fuy[e]re [que] nos nunca fuyamos,

syn el cond a Casty[e]lla jamas nunca vengamos,

el que antes tornare por traydor le tengamos,

la senna de Casty[e]lla en la manol' pongamos.》

658 《Sy el conde es fuerte, fuerte sennor llevamos,

el conde de Casty[e]lla nos buscar le vayamos,

alla fynquemos todos o aca le traygamos,

tardando esta cosa mucho menoscabamos.》

Aprés de la uerta ovieron la batalla,/ arrancólos mio Çid el de la luenga barba. (Poema del Cid, 1221—1226)

- 659 «Al conde de Casty[*e*]lla muy fuert onrra le damos,
el puja cada dia e nos menoscabamos,
semeja que el lidia e nos nunca lidiamos,
don Cristo nos perdone que tanto nos pecamos.»
- 660 «Que veamos que preçio damos a v[*n*] cavero,
somos mas de trezientos e el solo sennero,
e syn el non tazemos valia d'un dynero,
pyerde omne buen preçio en poco de mijero.»
- 661 Quando Nunno Layno acabo su rrazon,
a chycos e a ggrandes plogo de coraçon.
Rrespondieron le luego mucho buen infançon:
«Todos lo otorgamos que es con grran[*d*] rrazon.»
- 662 Fyzieron su ymagen, com antes dicho era,
a fygura del conde, des[*s*]a misma manera;
pusyeron la en carro de muy fuerte madera,
sobydo en el carro entraron en carrera.
- 663 Todos chycos e ggrandes a la pyedrra juraron,
commo a su sennor assy la aguardaron,
pora yr a Navarra el camino tomaron,
en el primero dia a Arlançon llegaron.
- 664 Desende otrro dia es[*s*]a buena conpanna,
su sennor mucho onrrado, su senna much estrranna,
pas[*s*]aron Montes d'Oca, vna fyera montanna,
solia ser de los buenos e los ggrandes d'Espanna.
- 665 Caveros castellanos, conpanna muy lazrada,
fueron a Byl Forrado fazer otrra albergada;
qual a Dios demandaron ovyeron tal posada,
movyeron se otrro dia quando al alborada.
- 666 [En]antes que ovyesen vna legua andado,
salida fue la noche e el dia aclarado;
el conde con su duenna venia mucho lazrado,
quando vyo la senna muy mal fue desmayado.
- 667 La duenna la vyo antes e ovo grran[*d*] pavor,
dixo luego la duenna:«¿Que faremos, sennor?
Veo vna grran[*d*] senna, non se de que color,
o es de mi hermano o del moro Almonoçr.»

- 668 Fueron en fuerte quexa, non sabyan que fyzies[s]en,
 [ca] non veyen montanna do meter se pudies[s]en,
 non sabyan con la quexa que consejo prendies[s]en,
 qua non veyá logar do guaryda ovyes[s]en.
- 669 Eran en fuerte quexa que nunca fue tamanna,
 quisieran sy podieran alçar se a montanna,
 que se asconderian siquiera en cabanna;
 fue catando la senna mesurando la conpanna.
- 670 Conosçio en las armas commo eran cristianos,
 non eran de Navar[r]a nin eran de paganos,
 conoscio commo eran de pueblos castellanos,
 que yvan a su sennor sacar d'agenas manos.
- 671 «Duenna, dixo el conde, non dedes por end nada,
 sera la vuesttra mano dellos todos besada,
 la sen[n]a e la gente que vos vedes armada,
 aquella es mi senna e ellos mi mesnada.»
- 672 «Oy vos fare sennora de pueblos castellanos,
 seran todos convusco alegrues e loçanos,
 todos chycos e grrandes besar vos han las manos,
 dar vos he en Casty[e]lla fortalezas e llanos.»
- 673 La duenna [que] estava tryste e desmayada,
 fue con aquestas nuevas alegrue e pagada;
 quando vyo que era a Casty[e]lla llegada,
 dio [le] grraçias a Dios que la avya byen guiada.
- 674 [En]antes que'l su pueblo al conde fues llegado,
 fue adelant vn omne e sopo est mandado:
 commo venia el conde byen alegrue e pagado,
 que traya la infanta e venia muy cansado.
- 675 Las gentes castellanas quando aquesto oyeron,
 que venia su sennor e por çierto lo tovyeron,
 nunca tan manno gozo castellanos ovieron,
 todos con alegruia a Dios lo gradesçieron.
- 676 Tant avyan de grran[d] gozo que creer non lo quisieron,
 dieron se a correr quant de rrezio pudieron;
 [en]antes que llegas[s]en al conde conosçieron,
 allegaron se a el, en barços le cojieron.

- 677 Fueron besar las manos todos a su sennora,
diziendo: «Somos rricos castellanos agora.
Infanta donna Sancha, nasçiestes en buen ora,
porend vos rresçebymos [*de*] todos por sennora.»
- 678 «Fiziestes nos merçed, nunca otra tal viemos,
quanto byen nos fyziestes contar non lo sabryemos,
.....
sy non fuera por vos cobrar non lo podieramos.»
- 679 «Saquastes a Casty[*e*]lla de grran[*d*] cavtyvydat,
fyziestes grand merçed a toda cristiandat,
mucho pesar a moros, esto es [*la*] verdat,
tod esto vos ggradesca el Rey de Magestat.»
- 680 Todos e ella con ellos con ggrand gozo lloravan,
tenien que eran muertos e que rresuçitavan,
al Rey de los çielos bendezian e laudavan,
el llanto que fazian en grran[*d*] gozo tornava[*n*].
- 681 Llegaron de venida todos a Byl Forado,
aquesta vylla era en cabo del condado;
vn ferrero muy bueno demandaron priado,
el conde don Fernando de fierros fue sacado.
- 682 Fueron se pora Burgos quanto yr se podieron,
luego que y llegaron grandes bodas fezieron,
non alongaron plazo, bendiçiones prendieron,
todos ggrandes e chycos muy ggrand gozo ovieron.
- 683 Alançavan tablados todos los caballeros,
a tablas e escaques jugan los escuderos,
de otrra part matavan los toros los monteros,
avya y muchas çitulas e muchos vyoleros.
- 684 Fazian muy ggrand gozo que mayor non podian,
dos bodas que non vna castellanos fazian,
vna por su sennor que cobrrado avyan,
otrra por que entramos bendiçiones prendian.

(Poema de Fernán González, Clas. Cast., Nò. 128, estrs. 653—684)

まず、estrs. 653及び654, 特に654 a, b の導入部によりフェルナン・ゴンサレスの家臣についての描写が始まる。次いで、その家臣の内の一人ヌーニョ・ライネス (Nunno Laynez de seso natural) の建議下に一致して、その主君フェルナン・ゴンサレスの救出に当らんとする堅き決

意が言表の中心となる。ここに用いられた時制形式は *pretérito* であって、夫々の行為が断固たる決意の下に実行に移されることを示している。次の段階では、フェルナン・ゴンサレスとサンチャ姫の二人が敵の手を逃れ行く有様の描出があるが、これはその前段の *pretérito* によってのみ行為が息も付かせぬ様な速度で、急激に完成、成就した場合とは対照的に、この主人公二人に関する付帯、随伴の状況を表わすもので、これが次の家臣との出会をより効果たらしめる為の一準備段階、導入部と言えるだろう。Estrs. 668—669 の部分の役割である。次いで、estr. 673 の *La duenna... fue... alegrue y pagada, dio gracias a Dios...* の *pretérito*, estrs. 675—676 の *castellanos* を主体とする *pretérito* は、夫々の主体の歓喜の様子を、強烈にしかも又効率的に最大の関心事として表示しているものであり、まずここに創作者の個々の行為に対する表現上の意図を読み取るべきであろう。次いでは又視点の転換が求められるのであろう、再び *imperfecto* がバック・グラウンド・ミュージック的な機能で estr. 680 に現われて来る。特に注意すべきは *Al Rey de los cielos bendezian e laudauan* (680-c) で、これは前出の (*La duenna*) *dio [le] graçias a Dios* (673-c) と対立するが、*pretérito* と *imperfecto* の説話部での機能上の明確な差を示すことになる。次いでは estrs. 681—682 が問題となる。ここでは僅か 8 versos によって、それまで手枷足枷をはめられていたフェルナン・ゴンサレスが又元の雄々しき雄者に立ち帰る様が力強く述べられている。これは、吟誦者にも、又聴衆にとっても最大の関心事であることは言うをまたず、従って *pretérito* が用いられている。ここではすでに *Castiella* 独立の雄、フェルナン・ゴンサレスがその勇姿を表わしている。次の二連では家来の *castellanos* を率い *Burgos* に帰り、サンチャ姫と目出たく結婚の式を挙げたフェルナン・ゴンサレスが主題である。この二連の *pretérito* で、これまでのクライマックスが力強く、ダイナミックに現われて来る。次の二連はこれまでの説話体を構成して来た緊張、緩和、緊張、緩和……の交叉に一応の終止符を打ったための部分であって、その直前の二連の示す大団円の結果として表われた一状態を結論的に表わすのである。この意味で、*Fazian muy grand gozo...* (684-a), *...bendiciones prendian* (684-d) と estr. 682 に存在する同一の表現とは単なる時制形式の差のみならず、いわゆる詩人の意識の中核となる行為と、第二次的随伴状況の差が明示されているし、estr. 684 は詩人が、緊張、弛緩……の繰返しを経て最大の関心事を語り終えた後の緊張からの解脱、急激な表現の停止を避ける為の漸弱的機能、静止に向っての安らぎを *imperfecto* で示したと考えたのである。これによって、聴き手も一つのエピローグを知覚出来るのである。

以上かなり独断的に *pretérito* と *imperfecto* の説話形式に於ける機能を位置付けたが、*Apolonio* にあっても同一の原則に準拠した時制形式の配置が見られるし、又 *Cid* にも、*Romancero Viejo* にも数多く存在する *pretérito* と *imperfecto* との相関関係にうかがえる詩人、語り手の基本的態度は *pretérito* を中核とし、いわゆる雰囲気作りの機能を *imperfecto* に割当るという表現手法であると結論させるのである。この二時制形式の *Romancero Viejo* に於ける機能についての的確な観察、《...el *pretérito* irrumpe bruscamente en escenas descriptivas de ambientación realizadas por el *imperfecto*》を説話形式の言語活動全体に共通する原則と考えるべきであろう。⁽²⁰⁾

(註20) J. Sziertics: Op. Cit., pág. 101.

(V)

さて結論を急がねばならない。前掲の時制頻度数の調査が示す様に、特に問題とした *mester de clerecía* の二作品、*Fernán González* と *Apolonio* とは、*Cid* に比べて *pretérito* と *imperfecto* の使用頻度数が圧倒的に高い。これは何を意味するかとの問いかけに対する解答が求められる訳である。まず伝統文法的な見地からの「動詞時制形式は時間区分的な時を表わすもの」という考え方からは何の解答も得られない。これに次ぐ *pretérito* と *imperfecto* に帰せられたアスペクトを基とする説明も、部分的には説得力を持つが、*Cid* 及び他の二作品、*Romancero Viejo* に数多く現われる *pretérito* と *imperfecto* の一見無原則、無秩序と思える様な用法に関する説明には無力である。従って、ここで我々は *poesía narrativa* (物語詩) という一表現形式、その特徴とする機能、それから生ずる技巧としての手法を起想せねばならない。この意味で、K. Togeby のアスペクトに意味的機能を立てた考え方、即ち「完了相は一言表に於いての主題 (*premier plan*) を表わし、不完了相はその付帯状況 (*second plan*) を表わす」とする説は卓見であり、夫々の相の典型である *pretérito* と *imperfecto* の言語活動に於ける位置を明瞭に示したものと言えるだろう。これを基とすれば、上述の *pretérito* と *imperfecto* の機能は狭義の物語詩のみならず、説話を目的とする形式全体に共通する言語活動の一現象と見做すことが出来るし、夫々の場に現われる特殊な現象—例えば *presente histórico*, *presente* に代る *imperfecto* 等—の考察もこの前提を無視し得なくなるのだ。さて、同一時制形式を長時間維持し、これによって言表を構成するのは言表そのものに単調さを生むばかりであると言われるが、これは正に *Fernán González*, *Apolonio* がその好例となる。しかし、ここでは幾十年にも亙る経過推移が僅か 4000 *versos* (対話部をも含む) によって表わされるとすれば、第二次的要素は切り捨てられ、諸々の場面で詩人、聴き手にとって最大の関心事に意識が傾注されるのは当然である。この結果、ある程度の単調さは存在するが、補って余りある無駄のない説話の手法、きらびやかさはなく、むしろ地味ではあるが、主題から焦点のずれることのない、迅速に展開する表現形式をこの *premier plan* の典型的時制形式である *pretérito* の充満した言表の中に読み取りたいのである。

終りに、前述の Harald Weinrich がその著 *Estructura y Función de los Tiempos en el Lenguaje* により、従来の時制に関する概念、特に *Consecutio Temporum* を再検討し、構造主義的観点から時制形式の再編成を行ない、これを双断的に分類し、これを基に言語活動は二つの局面、即ち *mundo comentado* と *mundo narrado* から成るとの説を立てていることに注目したい。彼によれば、時制形式はすべて上記のいずれかの言語活動の分野に属すべきものであって、*mundo comentado* の基本時制形式として *presente* を想定し、*mundo narrado* には *pretérito* と *imperfecto* にこの機能を認め、いずれも夫々の言語活動の分野に於いては“*architipo*”として作用すると主張し、時制に関して従来考えられて来た「時間区分的な概念での時」との関連付けを排除している。これこそ、現在まで不完全ではあるが問題として来た一連のイスパニア

語の叙事詩, mester de clerecía の諸作品, Romancero Viejo の動詞時制形式の一見無秩序, あ
るいは単調と思える使用を解明する為の出発点とすべき考え方であると思う。即ち, 若し言語活
動に二つの分野を認め, 夫々の基本時制を上のように仮定したとすれば, 今ここで問題としている
pretérito と imperfecto には「時」の観念を離れた mundo narrado に特徴的な機能を想定せ
ねばならないし, これが Fernán González の一節を例として簡単に考察した二形式の独特の機
能であり, これが相互補かんした形で, mundo comentado の presente に対立する概念となる
のであろう。勿論, mundo narrado に含まれる個々のジャンルにより, pretérito と imperfecto
の比率に差が存在することは言うまでもないが, いわゆる second plan を表わす時制形式が高
い比率を占めれば占める程, 叙事詩に関し比喩的説明としてしばしば引用される「映画的手法」
が強く意識されることになり, 逆に pretérito の割合が高くなれば, これは決して稚拙さ又は形
式化を示すものではなく, ここにかのシーザの有名な言, Veni, Vidi, Vinci に象徴される強烈で,
急速な言表の展開をくみ取らねばならないと結論したいのである。ここに前述の《Gramática
Axiológica》の存在を見ることが出来るのであろう。

〔1972年8月〕

主要参考文献

- R. Menéndez Pidal : *Cantar de Mio Cid*, Vols. I, II, III, Madrid, 1954.
- R. Menéndez Pidal : *Romancero Hispánico*, Tomos I, II, Madrid, 1953.
- R. Menéndez Pidal : *Romancero Tradicional*, Tomos, I, II, III, Madrid, 1956 y 1969.
- Américo Castro : *La Realidad Histórica de España*, México, 1954.
- Rafael Lapesa : *Historia de la Lengua Española*, Madrid, 1959.
- Rafael Lapesa : *De la Edad Media a Nuestros Días*, Madrid, 1971.
- Stephen Gilman : *Tiempo y Formas Temporales en el Poema del Cid*, Madrid, 1961.
- Joseph Szertics : *Tiempo y Verbo en el Romancero Viejo*, Madrid, 1967.
- Harald Weinrich : *Estructura y Función de los Tiempos en el Lenguaje*, Madrid, 1968.
- E. Alarcos Llorach : *Estudios de Gramática Funcional del Español*, Madrid, 1972.
- Knud Togeby : *Mode, Aspect et Temps en Espagnol*, Kobenhavn, 1953.
- Carmelo Gariano : *Análisis Estilístico de los Milagros de Nuestra Señora de Berceo*, Madrid, 1965.
- F. López Estrada : *Introducción a la Literatura Medieval Española*, Madrid, 1962.
- Walther von Wartburg : *Evolución y Estructura de la Lengua Francesa*, Madrid, 1966.
- C. Bandera Gómez : *El Poema de Mio Cid : Poesía, Historia, Mito*, Madrid, 1969.
- William E. Bull : *Time, Tense and the Verbs*, Berkeley and Los Angeles, 1968.
- William E. Bull : *Modern Spanish Verb-Form Frequencies (Hispania 30)*, 1947.
- W. E. Bull and R. Farley : *An Exploratory Study of the Nature of Actions and the Function of Verbs in Spanish (Hispania 31)*, 1948.
- A. Granville-Hatcher : *Tense Usage in the Roland*, *Studies in Philology*, 1942.
- A. Granville-Hatcher : *Epic Patterns in Old French*, *Word*, 1946.
- J. Roca Pons : *Introducción a la Gramática*, I, II, Barcelona, 1960.
- G. Bleiberg y J. Marías : *Diccionario de Literatura Española*, Madrid, 1964.
- Karl Vossler : *Filosofía del Lenguaje*, Buenos Aires, 1957.
- Karl Vossler : *Algunos Caracteres de la Cultura Española*, Buenos Aires, 1946.
- Florencio Janer : *Poetas castellanos anteriores al siglo XV*, Tomo 57, *Biblioteca de Autores Españoles*, Madrid, 1952.
- A. Zamora Vicente : *Poema de Fernán Gozález*, *Clásicos Castellanos*, 128, Madrid, 1954.